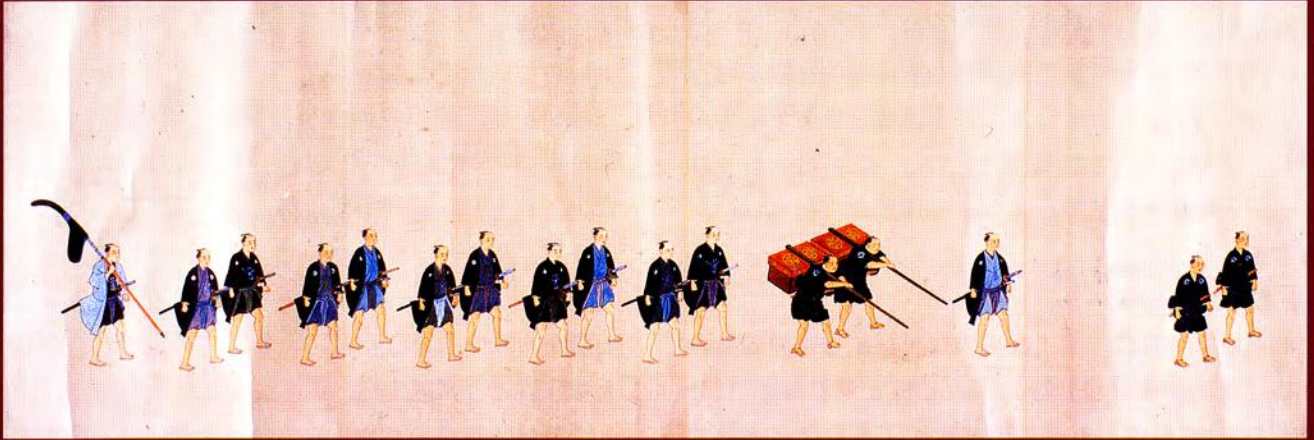


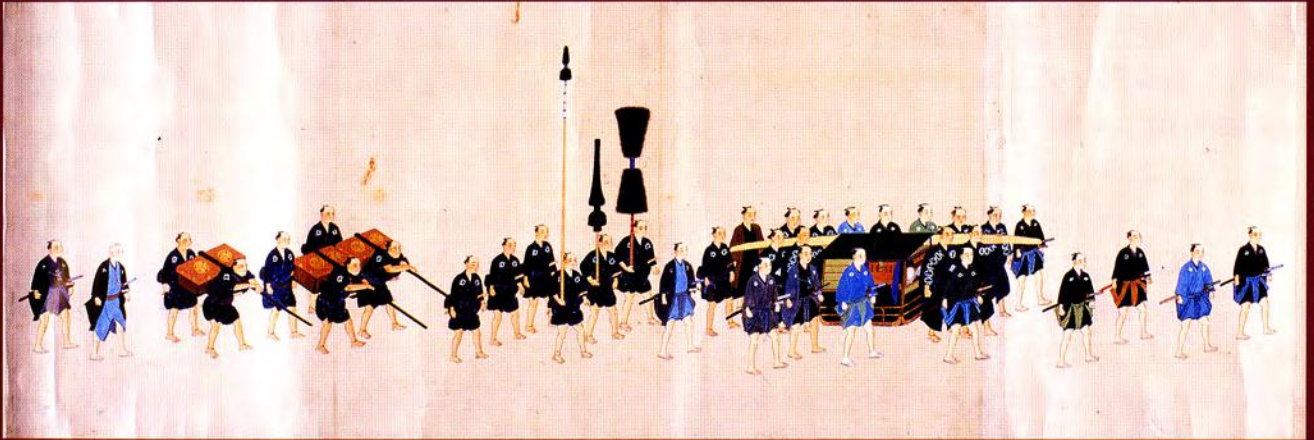


# 博物館だより

第53号



①



②



③

松平大和守侯行列図巻（前田金次郎氏蔵）

以下4ページに続きます。

# 松平大和守侯行列図巻の紹介 (前田金次郎氏蔵)

はじめに

今年度市内在住の前田金次郎氏から、「松平大和守侯行列図巻」の寄託を受けました。

本絵巻は、従来明治時代になって小笠原長生によって制作されたと考えられてきました。ここでは、箱裏書(識語)や描かれた行列の姿を改めて見直し、若干の考察を加えながら本絵巻の紹介を行います。

江戸時代の大名行列は、軍装を整え隊列を組んで行進する行列を指し、その家の格と武威を象徴するものでした。大名行列は参勤交代を始め、江戸城登城・日光社参・婚礼・葬礼等さまざまな種類の行列(供揃)がありました。

## 1. 松平大和守家

松平大和守家は、徳川家康の次男結城秀康の五男の直基(『徳川諸家系譜』等による)を祖とする御家門(徳川家の一族)です。五代目の朝矩が明和4年(1767)に前橋から川越に転封し、以後直恒・直温・斉典(矩典)・典則・直侯・直克と慶応2年(1866)までの約100年間川越藩主を勤めました。石高は15万石でしたが、斉典時代の天保12年(1841)に17万石となりました。また文政10年(1827)に11代将軍徳川家斉の24男紀五郎を養子としたことにより、定紋を桐紋から三つ葉葵紋に替えました。文政10年以降の「武鑑」には、松平大和守家の定紋は三つ葉葵紋と記されています。大和守家は川越藩主時代には、参勤交代で川越街道を利用しました。江戸溜池の上屋敷から川越城まで約11里(約44km)ある道程を、約20時間かけて通行していたことが、「前橋藩松平家記録」によって知られます。

## 2. 伝来等

本絵巻は、現所蔵者である前田金次郎氏の義父にあたる宮崎宮丸氏が入手し、その後前田家所蔵となりました。宮崎家は代々東秩父村で医業を営み、宮丸氏の代に川越に移住してきたということです。宮丸氏が本絵巻を入手した経緯や時期、また、本絵巻のそれ以前の経緯については不明です。

## 3. 寸法等の形状

本絵巻は木箱に納められています。箱表に「松平大和守侯行列図巻」と墨書され、箱蓋裏には小笠原長生による識語が記されています。本絵巻には標題は記されていません。装丁は卷子仕立てとなっており、本紙は21紙で構成されています。第1紙のみ縦390mm×

横260mmで、第2～21紙までは縦390mm×横275mmです。見返しを含めた全体の寸法は、縦420mm×横6152mmです。また本紙には、人物や駕籠等行列の様子が彩色で詳細に描かれています。但し文字の記載や、作者の署名等はありません。全体的に保存状態は良好で、本紙の剥落等はほとんどありません。

## 4. 内容

### 1) 小笠原長生と識語

識語を記した小笠原長生は、肥前唐津藩主(現佐賀県唐津市)小笠原長行の長男として、慶応3年(1867)に生まれました。明治期以降は海軍軍人として活躍する一方、文学の才能が豊かで、多くの著書を残しました。明治17年(1884)には子爵を授けられました。彼は旧松平大和守家の松平直方の娘秀子と結婚し、旧松平大和守家とは姻戚関係にありました。

識語は墨書で記され、小笠原長生の署名と印章があります。この識語は、明治辛丑年8月17日との記載から、明治34年(1901)8月17日に記されたことがわかります。最初の「是係旧幕時 中略 者知其風俗也」までは、本絵巻をみた長生の感想が中心に記されています。文末の「頃日侯家世子示余此図徴一言乃書所感還之」という記述から、長生が本絵巻を松平大和守家の末裔の人から見せられて、一言所感を記して返却したということがわかります。つまり、小笠原長生は本絵巻の作者ではなく識語のみを記したこと、そして、明治34年には既に本絵巻は存在し、それを旧松平大和守家が所蔵していたことがわかります。

### 2) 本絵巻に描かれた行列の姿

本絵巻には、総人数120人と馬4頭の御供揃が描かれています。藩主は網代張りの乗物に乗り、馬上2名の武士は継上下姿で描かれています。先頭から主な姿を挙げますと、先払・金御紋御挟箱・徒歩・御長刀持・藩主乗物(網代張り)・御供頭・近習・小姓・供士・杵黒熊毛槍鞘持・爪折傘持(立傘)・槍持・御跡挟箱・茶坊主・茶弁当持・台持・御牽き馬(虎皮鞍覆)・合羽籠・御召馬・柄杓持・合羽籠・供・御供頭(馬上)・槍持・合羽籠・御供頭(馬上)・十文字槍持・合羽籠・槍持・挟箱・押・供・合羽籠・供という順序になっています。この行列は、先払から供までが藩主直属の本隊で、御供頭から供までが家臣や家臣に仕える奉公人の行列という、大きく二つの要素から構成されていたと考えら

れます。また、本絵巻には金御紋御挟箱・御長刀・杵黒熊毛槍鞘・爪折傘・虎皮鞍覆等、松平大和守家の家格を象徴したり、限られた大名だけに使用が許された道具類が描かれています。杵黒熊毛槍鞘は松平大和守家藩主の象徴であり、行列の際には常に藩主のそばに立てられました。金御紋御挟箱や虎皮鞍覆は、石高10万石以上で、かつ、幕府から許可を得た大名のみ使用が許された代表的な道具です。

本絵巻の行列には名称が記されていないため、正確な行列の姿を知ることはできません。ただ、「武州河肥城主松平大和守齊典公御嫡子紀五郎殿初メテ登城之図」・「徳川親藩旧前橋城主拾七万石松平家江戸府内供立之図」（群馬県立文書館蔵）、「前橋藩松平家記録」（前橋市立図書館蔵）、「武鑑」（寺田勝廣氏蔵）等の資料から松平大和守家の行列を知ることができるので、これらの資料を参考に、本絵巻の特色を考えてみます。

まず本絵巻に描かれている行列の道具類は、文政10年以降の「武鑑」の松平大和守家の項にすべて記されており、順序も「武鑑」の記述とおりに描かれています。つまりこの行列の姿は、松平大和守家の行列の際の家格と、その作法を正しく描いています。そのため本絵巻は、松平大和守家の行列の姿を正しく描いた資料であると考えられます。そして本絵巻の行列の姿は、「徳川親藩旧前橋城主拾七万石松平家江戸府内供立之図」の姿とほぼ共通している特色があります。しかしこの行列には、鉄砲組・弓組・槍組・具足櫃等、参勤交代には欠かせない姿は描かれていません。また、享保6年(1721)に定められた10万石以上の大名の規模である、総勢300人程より少ない120人しか描かれていません。

以上の特色を総合的に判断すると、本絵巻は松平大和守家の参勤交代の行列を描いたものではなく、江戸城への登城行列の姿を描いたものと考えられます。

次に本絵巻の描かれた年代について考えてみます。藩主は江戸城に、年始や参勤・御暇(帰国)、官位叙任、將軍や藩主の代替わり等の御礼の目的で登城したので、その数は年に何度もある場合もあり、特定の年代を比定するのは非常に困難なことです。ただ描かれた行列の特色から、ある程度の年代を限定することは可能です。それは、松平大和守家が三つ葉葵紋を定紋とするのが文政10年で、「虎皮鞍覆」の使用は、天保元年(1830)の武鑑に記されています。そのため本絵巻は、少なくとも天保元年頃から幕末(慶応4年[1868])まで

の行列の姿を描いていると考えられます。

### 3) 作者

本絵巻には署名等がないため、特定の作者を比定することはできません。しかし、本絵巻に描かれている人物や道具類は精緻な描写であり、行列の姿は当時の松平大和守家の家格を正しく表現しているため、画業を専門とし、松平大和守家の家格や行列の作法を熟知している人物が想定されます。また本絵巻は、識語から明治30年代(1897~1906)までは松平大和守家が所蔵していた由緒があります。そのため本絵巻の作者は、松平大和守家の御抱絵師である森氏を含めた松平大和守家にゆかりの人物である可能性も考えられます。

### おわりに

松平大和守侯行列図巻について、今回の考察の概要をまとめると以下のようになります。

- ・行列の内容 松平大和守家藩主の江戸城登城の行列
- ・描かれた年代 天保元年(1830)頃から慶応4年(1868)頃の間
- ・行列の特色 藩主は網代張りの乗物。金御紋御挟箱・杵黒熊毛槍鞘・虎皮鞍覆等松平大和守家の家格を象徴する道具が正しく描かれています。
- ・行列の人数 120人 馬4頭
- ・その他の特徴 箱裏書きあり。明治34年(1901)8月17日、小笠原長生による識語。
- ・作者 不明。但し、描かれた行列の姿の特色や本絵巻の由緒から、藩の御抱絵師も想定されます。
- ・成立年代・目的 不明

本絵巻は、作者や成立年代等不明なところもありますが、明治30年代までの由緒ははっきりしており、江戸時代後期から末期頃の松平大和守家の行列の姿を正しく描いた資料で、当時の大名行列の様子を知ることができる大変貴重な資料といえます。

尚、今秋頃に「松平大和守家の大名行列(仮称)」展で、本絵巻を紹介する予定です。

(学芸担当 井口信久)

### 付記

今回の資料紹介にあたり、資料所蔵者である前田金次郎氏、また、「武鑑」の所蔵者である寺田勝廣氏から多大な御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。注「識語」を引用するにあたり、漢字は常用漢字に改めました。

### 【主要参考文献】

『有職故実大辞典』(株)吉川弘文館 1996  
『川越街道展－板橋から川越まで 人・道・歴史－』板橋区立郷土資料館 1992



④



⑤

松平大和守侯行列図巻 (前田金次郎氏蔵)



(金御紋御挟箱) 部分



(爪折傘 杵黒熊毛槍鞘 藩主乗物) 部分



(虎皮鞍覆) 部分

是係旧幕時前橋侯鹵簿圖子々干旄整々  
 隊伍披閱之際當時光景宛然会于睫矣  
 中興後既三十余年老者漸去壯者不及見  
 之苟非圖示之不能使來者知其風俗也  
 頃日侯家世子示余此圖徵一言乃書所感  
 還之  
 明治辛丑八月十七日  
 鳳翼小笠原長生識

翼鳳

識語解讀文

此係舊時前橋侯鹵簿圖子々干旄整々  
 隊伍披閱之際當時光景宛然会于睫矣  
 中興後既三十余年老者漸去壯者不及見  
 之苟非圖示之不能使來者知其風俗也  
 頃日侯家世子示余此圖徵一言乃書所感  
 還之  
 明治辛丑八月十七日  
 鳳翼小笠原長生識

識語

# 元町2丁目保管「猿の操り人形」について

日本女子大学教授 福原 敏男

川越の旧十ヶ町の一つ、元町2丁目(旧高沢町)の「山王の山車」(江戸時代は「猿の山車」)は、現在、猿の面を胸にかけ御幣を持った能人形である。江戸中期の『氷川祭礼絵巻』(ニューヨーク・パブリック・ライブラリー蔵)では、町内よりの出し物の先頭として高沢町が出、傘鉾の「出し」(頂点の印、飾り)として、烏帽子を被り軍配を持った猿人形がのっている。近世後期になると、一本柱の上の勾欄に猿の人形をのせた二輪の山車となる。文政9年(1826)の『川越氷川祭礼絵巻』(川越氷川神社蔵)には烏帽子、狩衣姿は同様であるが、一本柱に太鼓がつき、台上に唐人衣装の太鼓打ちが描かれ、天保15年(1844)の『川越氷川祭礼絵馬』(川越氷川神社蔵)にも同様な山車が見られる。

ところが、文政9年の『川越氷川祭礼絵巻』(川越氷川神社蔵)では、『氷川祭礼絵巻』(ニューヨーク・パブリック・ライブラリー蔵)と同様な、4人で担ぐ、古風な傘鉾上の猿出しが本町の出し物となっている。田中敦子氏は「絵画資料に見る山車行事の変遷」(『川越氷川祭りの山車行事』川越市教育委員会刊)において、このような出しを明暦頃の『江戸天下祭図屏風』(京都個人蔵)に描かれた南伝馬町の出しと比較されている。

以上のような、一本柱頂点にあって「出し」と表現される人形とは異なるものが元町2丁目に受け継がれている。写真1が町内保管の操り人形(厨子入り)で、「山車の御祭神」ともいわれ、川越祭には必ずお神酒

所に祭壇を設けて飾る仕来りである。(木下雅博著『川越まつりと山車』)

従来、川越祭り研究においてはこの操り人形を射程に入れて考えてこなかったが、もしかしたらある時期、祭りに参加したからくり人形であった可能性は否定できない。

赤坂山王権現の山王祭礼を描いた『江戸山王祭礼図巻』(3巻、紙本着色、東京個人蔵)の第3巻目に富沢町が出した出し物が描かれている。写真2のように、総勢15人、もちろん描かれているのは出演者の何分の一かであろう。富沢町は現日本橋富沢町付近の山王社の氏子町であり、頂点が髭籠の「出し」の町印が行く。次に、柄杓の水車の上に金色の烏帽子と御幣の猿人形がすわり、金色烏帽子の猿2匹と母衣背負い人形を輿にのせて昇っている。輿の下には紐が2~3本下がっているのが見え、これを操作することによって、2匹の猿が交互に横棒で前方回転するからくり仕掛けであろう。本図は18世紀初頭から前半の山王祭礼を描いた作品と位置づけられる。

山王祭礼の棒を回転する2匹の猿は裸であり、元町2丁目とは異なるが、江戸山王祭礼には回転猿のからくり仕掛けがあったのである。

元町2丁目の猿が川越祭りに現実に出ていたものか、高沢町の先人が操り人形を入手しただけなのか、興味は尽きない。



写真1 猿の操り人形

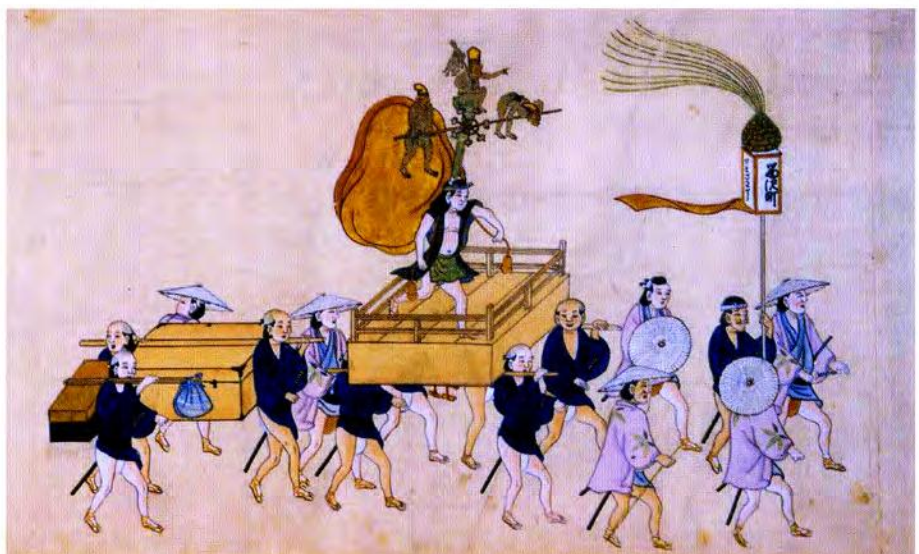


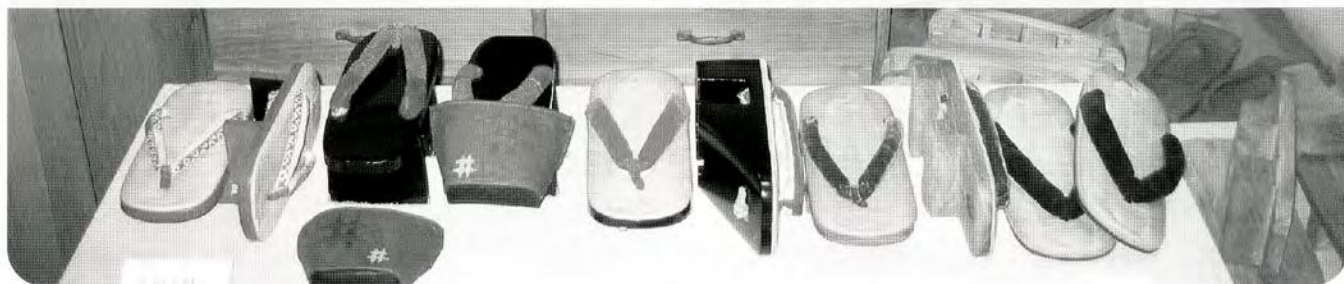
写真2 「江戸山王祭礼図巻」

## 「川越の職人」コーナー

### 下駄職人

城下町川越の伝統的な職人の仕事を再現する「川越の職人」コーナーでは、毎年1回の展示替えを行っています。

平成20年11月頃までの展示



今回の職人コーナーでは、喜多院門前で下駄を製造していた「大和屋」で使っていた道具類を展示しています。また、市内在住の方々が実際に履いていた下駄も合わせて展示しています。

下駄は、木の台の表面に3つの穴を空けて鼻緒を付けた履物です。台と歯が一つの木片できているもの（連歯下駄）と、台と歯が別々の木片からできているもの（差歯下駄）があります。連歯下駄は駒下駄が代表的なもので、後丸型下駄、ぼっくり型下駄や、畳表を付けた表付下駄などがあります。差歯下駄には、主に晴れた日に履く日和下駄と、雨の日に履けるように歯を高くした足駄があります。差歯は続飯のりで接着するものです。

下駄の歴史は古く、弥生時代後期の遺跡からは多数の田下駄が発見されています。奈良時代の平城宮跡からは連歯下駄が出土しています。平安時代から鎌倉時

代になると、出土資料だけでなく、文学作品や絵巻物などにも下駄がよく見られるようになります。江戸時代には各種の下駄がそろい、広く普及するようになりました。なお、下駄の呼称は、平安時代には「足駄」、室町時代には「ほくり」、江戸時代には「下駄」が用いられました。

江戸時代最後の慶応3年(1867)に作成された「武州入間郡川越町諸色明細帳」によれば、当時の川越城下には「下駄造」職人が6人いたことがわかります。時代が下って、明治35年(1902)に発行された『埼玉県営業便覧』によれば、当時の川越町には、「下駄商」として記載されている店舗が多く見られ、「照降商」や「鼻緒製造」等の関連業種を含めるとかなりの数に上ります。また、明治時代の古写真からも、下駄がこの時代には最も日常的な履物として浸透していたことがうかがえます。前述の「大和屋」には、明治時代から大正時代の下駄職組合の太子講関係文書や年季奉公の証書も数点伝わっており、下駄職人たちの結束を垣間見ることができます。

靴が普及してからは下駄を履く人も激減しました。しかし、近年下駄は、音と触感が新鮮に感じられるためか、若者をはじめとして幅広い世代で再び注目されています。

町を散策するのにいい季節になりました。この機会に、博物館にもぜひお立ち寄りください。下駄はもちろん、どんなお履物でも大歓迎です。





## がんばっています ジュニアボランティア

近年、家庭・学校・地域社会が一体となって子どもたちの豊かな人間性や社会性を育てていくことが強く求められています。その一つとして、ボランティア活動などの社会奉仕体験活動の重要性が一層高まっています。このことを受け、当館でも次代を担う子どもたちに、主体的にボランティア活動に参加できる機会を提供するジュニアボランティアを組織しています。

現在、当館のジュニアボランティアには、博物館近隣の小中学校を中心に児童・生徒合わせて8名が登録されています。主な活動内容は、毎月第2・4土曜日に実施される「土曜体験教室」での館職員の手伝いです。それでは、具体的にその活動内容を挙げてみます。

まず、参加者の受付を行います。これは、事前に体験教室に応募された方の氏名等を確認し、参加者へのアンケートを実施するとともに、体験等に使用する資料や材料を配付するものです。この時点で既に参加者の子どもたちとのコミュニケーションの輪が広がっていきます。次に、体験教室が始まると、不足した材料を渡したり、手順がわからない子どもへ声をかけるなど支援をしていきます。また、参加者と同じように体験教室で楽しく学ぶこともあります。この教室の対象が児童・生徒ということもあり、ジュニアボランティアの声かけが、まるで弟や妹に話しかけているかのようです。最後に教室が終了すると、机やイスの片付けと簡単な清掃をして全ての活動が終了します。この間、館職員や市民ボランティア(川越市内外の一般のボランティアの方々)とともに、チームワークよく協働していきます。

さて、このジュニアボランティアの活動をしようとした動機を尋ねると、「みんなの役に立ちたいと思っ

たから」や「おもしろそうだから」という答えが返ってきました。このことから、何とか人の役に立つ仕事をしてみたい(公共性)、自分の興味関心を高めていきたいという子どもたちの主体的な姿勢がわかります。また、自分の兄弟や保護者が当館のボランティア活動に参加していた姿から、やってみようと思った子どももいました。身近な人が進んでボランティア活動をするという環境が、自然なかたちで自発性を促したのでしょう。次に、ボランティア活動をしてどんな点がよかったかと聞いてみると、「やり方が分からない人に教えて、ありがとうと言ってもらったこと」「感謝してもらった時」との回答が多くありました。自分たちの活動が少しでも人の役に立たと実感し、さらに認知された時には、その喜びは大人でもうれしいものです。ましてや自分たちと年の近い子どもたちから感謝と敬意をはらわれることは、次への活動への大きな意欲(継続性)となっていくでしょう。これらの「公共性」「自発性」「継続性」は、まさしくボランティアの根幹を成すものです。それをボランティアの体験を通して身に付けていくことは、学校教育だけでは為し得ないすばらしい「学び」となるでしょう。

近年の都市化や少子化、家庭や地域における教育力の低下、情報化の進展等により、子どもたちが自らを取り巻く地域社会との関わりをもつ機会が乏しくなっています。そのことが、子どもたちの他者や地域に対する関心の低下の原因となっていることも指摘されています。このような状況の中、ジュニアボランティア活動に進んで参加する子どもを見ると、とても頼もしくなってきました。これからも初心を忘れずにがんばってほしいと思います。(教育普及担当 井口修一)

# 第17回收藏品展

## 明治・大正の暮らし ~ハイカラ家庭すごろく~



平成20年3月22日(土)~5月11日(日)

当館では皆様の御厚意により、数多くの資料を御寄贈いただいております。これらの寄贈資料を多くの方々に御覧いただくために、毎年收藏品展を開催しております。

今回の收藏品展は、橋本家の寄贈資料の中から主に明治・大正期に使われていた民具をピックアップし、当時流行していた「すごろく」を手がかりに、「家庭の一日」を構成しました。この展示を通して、当時のハイカラ趣味を取り入れた暮らしに思いをめぐらせていただければ幸いです。

### 利用の御案内

#### ◆入館料

区分	博物館	川越城 本丸御殿	川越市 蔵造り 資料館	共通入館(観覧)券			
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り 資料館 ●美術館 ●会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※( )内料金は、団体[20名以上、1名につき]の場合

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)※平成20年10月20日は開館  
第4金曜日(休日を除く、例外あり)年末年始(12月28日~1月4日)  
館内消毒(6月下旬) 特別整理期間(12月下旬)

\*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ  
(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館)

#### 交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より  
または西武新宿線 本川越駅より、  
・東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス  
下車徒歩8分、または「小江戸名所めぐり」  
乗車博物館前バス下車徒歩0分  
・イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物  
館・美術館前バス下車徒歩0分  
※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用く  
ださい。



#### 3月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	●3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

#### 4月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

#### 5月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
10	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

#### 6月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

※●印は3館休館(博物館、本丸御殿、蔵造り資料館)、●印は1館休館(博物館)

#### 編集後記

博物館では先日まで、市内の小学校3年生がミニ展「むかしの勉強・むかしの遊び」見学と、体験学習のため来館していました。体験では、ボランティアの協力のもと、重い石臼をまわしたり、洗濯板を使って洗濯をしたり、熱くて重い炭火アイロンを使ってアイロンをかけたりました。実際にむかしの道具を使えるという、子どもたちの興奮が指導をしている私まで伝わってきました。「楽しかった」「勉強になった」という感想を聞くと、うれしく、またボランティアの方々のおかげだと感じました。一年ありがとうございました。

発行日 平成20年3月31日

発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1 ☎049-222-5399 FAX 049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/